

メンガー文庫；ある経済思想の原資料  
The Carl Menger Library in Japan:  
a study of the sources of an economic thought

ジル・カンパニョロ (山崎耕一訳)  
CAMPAGNOLO, Gilles; YAMAZAKI Kōichi (tr.)

以下に掲載するのは、フランス人研究者 Gilles CAMPAGNOLO 氏がオーストリアの学界誌 *Austriaca* の 50 号 (2000 年) に掲載したフランス語論文 (原題: *La bibliothèque viennoise de Carl Menger conservée au Japon : étude des sources d'une pensée économique*) を、著者および *Austriaca* 編集部の承諾を得て、邦訳したものである。同氏が 2 年前の当年報に英語で執筆した論文 (“*Learning from Hitotsubashi's Carl Menger Library (Questioning the origins of Austrian economics)*”) 社会科学古典資料センター年報 第 20 号, pp. 1-16) と内容的に重複する部分もあるが、掘り下げが深くなっており、また新たな知見も加えられているので、再び掲載するに値すると判断した。なお、原文中にドイツ語で引用されている部分の訳出にあたっては、東京外国語大学助教授の中山智香子氏の援助・協力を得た。もちろん、ドイツ語引用部分も含めて訳稿全体に関する責任が訳者にあることは、言うまでもない。(山崎)

カール・メンガーの思想に関連する大量の文書が、日本に存在する。それらは、このウィーン大学教授 (1840-1921) の私蔵書の大部分を含み、教授による手書きの注記すべてを含むだけに、おろそかにはできないものである。メンガーの蔵書は、1880-1890 年代のヨーロッパにおける第一級の私蔵コレクションであったが、1922 年以来、東京の一橋大学に付属する社会科学古典資料センターに保存されている。カール・メンガーは、いまさら言うまでもなく、経済思想史の共通理解によれば、イギリス人のスタンレイ・ジェヴォンズおよびより有名なフランス系スイス人レオン・ワルラスとともに、限界効用学派の 3 人の産みの親のひとりである。19 世紀の末に限界効用学派は、経済学研究の分野において、マンチェスター派の古典派 (リカードとミルの後継者) およびドイツ歴史学派 (ヴィルヘルム・フォン・ロッシャー、グスタフ・フォン・シュモラー) のパラダイムをくつがえした。これら 3 人の思想家たちは、互いに独立にそれぞれの結論に到達し、相互に評価しあうことがほとんどないまま、近代経済学の諸基準を定義したのだった (メンガーからワルラスへの何通かの書簡は、このオーストリア人経済学者が、ワルラスの計算は限界学説に固有の対象を見失っていると考えていたことを示している。とはいえ学説史研究は、彼らのアプローチの相違を認めながらも、彼らを等しく限界学説の創始者とみなしているのである)。しかしながら、メンガーの蔵書は、メンガー自身とオーストリア学派との源泉を明らかにする資料をなすにもかかわらず、ウィーン大学経済学部から東京商科大学 (= 一橋大学) に移されて以来、実質的には研究されていないのである。

オーストリア経済思想のこの資産が日出づる国に去って以来、アメリカ (より正確にはイリノイ州のウェズレアン大学) に亡命したオーストリア人教授であるエミール・カウダー (Emil Kauder) のみが、この蔵書を間近に検討した。1960 年代に、限界効用概念の歴史を研究するため、彼はこの蔵書を調査したのである。限られた一部分しか研究しなかったが、それでも彼

は興味深い調査結果に到達した。それが我々の注意を引き、これらの文書をより周到に調査すれば、メンガー思想の源泉を真に明らかにすることができるであろうと思わしめたのである。本稿は、近代経済思想の源泉であるとともに、オーストリアの知的資産でもある、この文庫の一面を明らかにしようとするものである。そのためにも、かくも貴重な蔵書がかくも長い旅をすることになった由来を見ておこう。ついで、蔵書の内容が持つ主要な文献学的意味を、メンガーによる経済学の構築、およびその哲学的源泉の双方から探る。最後に、1年強におよぶ現地での研究から、現在の時点で確実に言える結論のいくつかを示したい。

## ウィーンの文庫のはるかな旅

1923年にウィーンから東京へ。これが、カール・メンガーの2万冊近い私蔵書からなる文庫が経験した旅である。メンガーは1921年に没したウィーン大学の経済学教授であり、とりわけ限界学説の創始者であって、この思想は、出身地の名をとって、ウィーン学派と呼ばれている。この学派が生まれたのは、実際にはメンガーの自宅で行われていた私的なゼミナールにおいてであって、そこにこの教授の弟子であるベーム-バヴェルクやフリードリヒ・フォン・ヴィーザーが集っていた。フリードリヒ・フォン・ハイエクやルドヴィヒ・フォン・ミーゼスなどは、より遅れての参加であるが、同様に学派の遺産請求をなしうる立場にある。しかし、メンガーのテキストは、頻繁に引用され、少なくともオーストリアの学界では読まれてもいるのだが、それらは編集されたものであり、従って部分的なものである。創始者によって付け加えられた注記や注釈は、利用不可能なままであった。メンガー文庫が移住したために、教授のもっとも熱心でもっとも熱意に富んだ弟子たちも多くの文書を見逃してしまうことになったのだが、この移住はいかにして、またなぜ生じたのだろうか。

この疑問に答えるためには、この件に関する主役の一人である大塚金之助氏に語ってもらうのがいいだろう。同氏は後年、一橋大学史に関する記事において、同大学が今日誇りとしているコレクションの購入と移送が引き起こした冒険について語っている<sup>1)</sup>。まず、日本人がこれほど特殊な文書類に興味を持ったということが奇妙に思われるかも知れない。実際、文庫がかくも遠い国に移ったのは、一連の偶然の結果によるのである。この僥倖を知ることが、まず必要であった。

「メンガー教授がなくなったことは、当時（1921年）のドイツの新聞にも大きく出だし…、*The Economic Journal*にも追悼文が出た。この追悼文のなかに、メンガー教授の *private economic library* のことが特記されていた。そこで、わたしは、当時、ベルリンにいた東京商大の留学生——生とっては失礼に当る年配のかたもあった——諸氏に、この文庫のことについて相談した。…

古書店をとおすと、重要な書物が抜かれる心配があるので、直接にメンガー夫人と交渉することがきまった。メンガー夫人も、何しろカード作成や文庫の移動や管理を何十年とうけもってきたので、やはり、直接交渉を希望していた。また、この文庫をめぐる、いくつかの強力な競争者があったことは、言うまでもない。こちらは、まだ、三十歳まえの若僧が多かったし、文庫の内容がどれほど深いものであるかもわからないので、さっそく三～四人の若僧がウィーンへ行った。」

<sup>1)</sup> 大塚金之助「カール・メンガー文庫の思い出」(『一橋大学附属図書館史』、一橋大学1975年、183頁～194頁) 初出は『読書春秋』(国立国会図書館内春秋会)1957年10月

歴史的文脈も介在してくる。1922年には、オーストリアは解体された帝国であって、瀕死の経済にあえいでおり、その状況はきわめて深刻だったので、奇妙な取り合わせも現実のものとなった。この取り合わせは、日本人にしてみれば、頭痛の種になる面もあったのである。

「いよいよ交渉がまとまった。当時のオーストリアは、天文学的数字の紙幣が乱発されていたインフレ時代だったから、代価はドルで、支払場所はスイスの銀行ときまり、これがまた、当時の学校当局の頭痛のたねになったことと思われる。

文庫の引きとりのときには、わたしたちは、もう一度ウィーンへ行った。そこで、わたしたちは、はたと、困ったことにぶつかった。というのは、オーストリア人の財産は国外に持ち出してはならないという法律が出ていたからである。そこで、思案のあげく、わたしたちは、ウィーンの本多熊太郎公使に打開策を相談した。本多公使は、すぐ快諾して、この文庫を日本公使館のものとして国境をとおすことにしようということになり、四十以上の大きな箱には、「日本公使館」という文字が大きく押されたのである。」

こうした状況は、しかしながら、大きなリスクを生み出していた。著者は、メンガー教授夫人の悲しみに触れながらも、文庫がリスクを免れたことを喜んでいる。彼は記す。

「遠い日本のあまり聞いたこともない大学へ、ほとんどからっぽになるまで、肖像から何から何まで——夫人が作ったカードまで——行ってしまうのだから、夫人の心境は察するにあまりがあった。…

書物の箱がどしどしトラックに積まれているときに、一人の新聞記者が来て、夫人に『メンガー文庫が日本へ行くそうですが』とたずねた。そのとき、ドアのところに立っていた夫人は、『それはわたしのわたくしごと (Privatsache) です』ときっぱりと答え、新聞記者が『ああそうですか』とすぐ引きさがった態度にも、わたしは感心した。…

本の箱は、ウィーンからハンブルグへ汽車で送られて船積みされる。それが、また、混乱していた当時のことであるから（著者は、もちろん、政党間の暴力的な対立のもとでワイマール共和国が成立したことを指している）、わたしたちの心配のたねになった。運送店から、無事荷積を終ったという知らせをうけたときには、わたしたちは、ほんとうに安心してよろこびあった。」

この積荷が、東京に着くやいなや関東大震災に遭い、さらにその20年後には、第2次世界大戦の際の東京大空襲に遭遇したのに、ともに奇蹟的に難を逃れたことをつけ加えるなら、この19世紀における第一級のコレクションが、ほとんど知られざる（この蔵書から生まれた思想を直接に受け継ぐ人たちの大部分にとっては、まったく知られざる）目的地に向かったこの旅は、暗黒時代の破壊をまぬがれた古代のマニュスクリプトがこうむったものにも比すべき試練だったと言えるのではないだろうか。

メンガー夫人が日本の購入者を選択した理由は、当時東京に送られた（そして、著者によって付録につけられた）報告書の抜粋に、明らかである。

「メンガー文庫の譲り渡しを最初に申出たのはヴイン大学でありましたが、『これは家の唯一の財産でこれを譲ると自分は乞食にならねばならぬから日本かアメリカへ売りたい』と夫人の直話でした。」

しかしながら、波瀾に満ちた大航海の後にも、この希有な文書が研究者の利用可能な状態で残るという幸運がありはしたものの、夫人の選択は、オーストリア経済思想のこの源泉を長期に渡って遠ざけることになったのだった。文庫は、いかに例外的なものとはいえ、それを探索し、内容を調査し、研究する労苦を払う人がいなければ、無に等しいのである。

## メンガー文庫の内容：歴史的・文献学的意義

カール・メンガーの蔵書のうちで日本にない部分は、このオーストリア人経済学者の個人的文書（書簡など）が中心であり、1980年にデューク大学（アメリカ、ノース＝カロライナ州）が購入した。これが、英文で公刊された *The Papers of Carl Menger, 1840-1921*<sup>2)</sup> の対象となっている。この文書類の意義は否定すべくもないが、日本にある文庫に較べれば明らかに見劣りがする。

逆に、カール・メンガーの蔵書が日本に移転したことの予期せざる結果のひとつは、1871年の主著『国民経済学原理』の唯一の別版を息子のカール・メンガー（Karl Menger）が父の死後（1923年）に出版する際に、依拠すべき資料がかなり欠けていたことである。息子のカールが利用した資料は、現在デューク大学に保管されているが、メンガー（父）が出版者から送られた1871年版に、訂正・補充・書換えのための書き込みをしたものが欠落している。この手書きの校注は第一義的な原資料である。一橋のメンガー文庫は、それ以外に何を含んでいるだろうか。

このコレクションは、全部で19100点からなる。もともになっているのは、すでに述べたように、メンガーが、大学教授としてのみではなく、思慮深い収集家として形成した個人蔵書である。それは、社会科学のあらゆる主題におよんでいる。まず第一に、もちろん、経済学であるが、そのほかにも法学、歴史学、財政学、哲学を含んでいる。いかなる分野もおろそかにはされておらず、哲学作品が比率の上で相対的に手薄である（メンガー夫人が、自分自身と息子のために、若干の作品を手元に残した）にしても、この経済学者の関心を特徴的に示すものとなっている。経済学に隣接する他の分野（社会学、さらには心理学など）についても、同様である。当時の大学の紀要も、多数見られる。メンガーは、じきに「オーストリア学派」の名で知られることになる動きの核となる少人数のグループを招いた研究会で、これらに載った論文について論じたのだった。

コレクションには、さらに、多くの旅行記が認められる。それらの民俗誌的記述は、このウィーンの教授の興味をかきたて、彼は、自分の思索を彩るのに、進んでこうした記述を用い、彼の著作、とりわけ『国民経済学原理』の注に取り入れたのだった。ヨーロッパの公的ないし私的機関の会計簿がかなり見られることは、メンガーが若い頃、帝国政府の官職に就く前には、金融や投資の分野で重要な活動をしていたことを思い出させる。これら一連の地位が、財政や行政との接触をはぐくんだのだった。さらに、多数の政治批判文書、あらゆる種類のパンフレットや書き物は、この研究者の好奇心に応えるためのものだった。

ドイツ語の作品が多数であるが、ヨーロッパのほとんど全ての言語、そして当然ながらオーストリア＝ハンガリー帝国の言語が認められる。ドイツ語以外ではフランス語と英語が優位を占めており、ラテン語や古代ギリシア語の作品もみられるものの、この蔵書はハプスブルク家の中央ヨーロッパにおける知的世界を反映しており、こうした角度からこの文庫を研究するのも有益であろう。ここでは単に、カール・メンガーの関心対象の多様性と、彼の精神の開放性とを、この文庫は示しているとのみ指摘しておこう。

彼のような公的地位にあり、また弟のアントンと異なって活動家的な情熱は持たないもの

<sup>2)</sup> Adam Matthews Publications, Marlborough, England, 1996

の<sup>3)</sup>、平和主義や決闘廃止に好意的な宣伝パンフレット、オーストリアに跋扈する反ユダヤ主義や帝国におけるカトリック教会の度はずれた権力に批判的な宣伝パンフレットを所持している事実は、上に見た自由な精神を証言するものである。政治や社会の動きに対するカール・メンガーの注目、確かに純粋に知的なものであり、なんらかの政治参加にもとづくというよりも、良質な好奇心によるものだった。自らの学問的著述の学問的価値を基本的に保証するものとしての、学者の中立性に対する、彼自身の確信は、そのような政治参加を自分に認めなかったであろう。彼は、活動家的な経済学者を、「弁護士」(ブルジョワジーのであれ、プロレタリアのであれ)と呼んでおり、彼らに軽蔑しか感じなかった。彼の蔵書は、全体として、困難に直面しているものの、それ故にいっそう知的には活発な帝国の高級官僚というメンガーの姿を示している。それは、進歩に対して開かれ、大変に「18世紀的」でヨーゼフ帝のような啓蒙専制君主のスタイルを持ったウィーンをよく示しているのである。

このコレクションでもっとも興味深い要素は、ひとつには『国民経済学原理』初版の出版者ヴィルヘルム・ブラウミュラー (Wilhelm Braumüller) からメンガーに送られた、同初版の一点であって、著者はそこにたくさんの書き込みをして、思想や表現を訂正している。もうひとつは、若干の作品に書き加えられた、欄外の多くの注である。

これら手書きの校注こそ、カール・メンガーの蔵書をして、単なるコレクションではなしに、彼の思想の真の貯蔵庫たらしめているものなのである。『国民経済学原理』第二版は、死後出版で、息子によって校合されたものだが、メンガーによる手書き校注の大部分を参照せずに行われたものであるだけに、メンガー文庫はいっそうに重要なのである。彼自身の著作にせよ、他の作者のものにせよ、欄外や、印刷されたページで書き込み可能な空白部分には、かなりの部分、付随する考察や注記、参照、反論、あらゆる種類の考察が書き込まれている。こうした考察は、肯定的評価を示している時もあれば、乖離、さらには明らかな反対を示す時もある。メンガーの思想は、これら未刊の文書を解明することによって、その正確な展開過程を読み取ることができるのである。

このような原資料に要求される精査に携わった先駆者がひとりいる。エミール・カウダー教授は、最初は1959年に、ついで1960-61年の学年に、一橋大学に客員教授として滞在し、メンガーの思想を研究するために、初めて文庫の資料を大量に利用した。その際に、一橋大学は同教授に対し、メンガーがその主著『国民経済学原理』に付した注を網羅的に復刻するよう要請したのであった。

それとは反対に、第二版は、しばしば研究に利用されるものだが、1923年の刊行である。死後出版で、息子が父から残されたテキストをもとに編集したが、1901年以降に書かれたテキストしか用いていない。息子のカール・メンガーは、彼自身がウィーン・サークルに近い数学者であるが、第二版の序文で、自分の仕事を説明している。1901年以前の父の仕事は痕跡をとどめておらず、1871年の版で父カール・メンガーが望んでいた表題の修正も欠落している。著者が初版の表題を放棄したのは、彼がめざしていた書き直しの方向を、おそらくよく示す指標であろう。彼はその書き直しをやりとげることではできなかったのだが。息子が表題を維持したのは、逆に、書き直し計画が失敗したこと、および、とりわけ、この計画に寄与したはずの校注が放棄され、忘れ去られたことを示している。この著作のふたつの版を読み比べてみれば、そ

<sup>3)</sup> アントン・メンガーは、法学者で政治理論家であり、社会主義の法理論を検討し、1896年のドイツ民法起草にあたって、民衆層に有利になるよう(福祉への権利、消費者の権利)、影響力をおよぼした。

のことがよく理解できる。ここでは、このテキストの専門家であるエミール・カウダーの説を取り上げよう。彼は、メンガーの注を復刻するために、その手稿の手に入る限りのヴァリエーションをすべて閲覧したのだが、次のように書いている。

「草稿のいくつかの思想は、第二版でより詳しく展開されているが（例：需要の理論）、一橋の草稿が1923年に出版された『原理』の準備稿だとするのは誤りであろう。」（原文英語）

我々は今日、カウダーの業績に再検討と補充を施すことにより、書き込みの公表を実現できるかも知れないだけに、1871年版の手沢本を文献学的に調査することからわかる技術的な詳細について、いくつか触れておくのが有益であると思われる<sup>4)</sup>。カウダーは、彼が遭遇した困難を説明している。

「なぜ彼が彼（＝父カール・メンガー）の書き込みに注意を払わなかったかは、かなり明らかである。断片に含まれる短い論考は、部分的にしか完成していないし、多くの注記は混乱しており、字体は読みにくい。経験をつんだ植字工でも、清書するのは困難だっただろう。」（原文英語）

しかしながら、カウダーも指摘しており、オリジナルを見てもすぐわかるように、出版者は、各ページごとに白紙を挿入した特装本をメンガーに送ったのだった。メンガーによる書き込みは、利用できるあらゆるスペースに及んでおり、注記が書き込まれていない部分もありはするが、他の箇所ではメンガー自身が挿入された紙にさらに白紙を貼り足しているのである。結果的に、印刷されているテキストから離れた新たな展開を読まされることになり、しかもその展開が何回となく修正されていて、色々な種類のインクが何層にももつれあっているのである<sup>5)</sup>。一橋大学の手沢本は、ざっと見直しただけの修正版などというようなものではなく、この経済学者の思索の発展を映し出しているものなのである（英語で言うところの、真の“work in progress”なのである）。

カール・メンガーが書き込みをしている点で重要な作品がもう一点あり、こちらもエミール・カウダーが復刻している。19世紀なかばのドイツで大変高く評価されていた経済学の教科書である、カール＝ハインリッヒ・ラウ（Karl-Heinrich Rau）の『国民経済学原理』である。メンガーは、その第七版<sup>6)</sup>に書き込みをしている。そのテキストは、上に述べてきたものと同じくらい研究が難しいものであるが、参照してみれば、カウダーが示した関心は正当であることが、改めて確認できる。山田雄三教授が（日本語および英語の）序文で指摘しているように、メンガーがこの教科書に行なった書き込みは、それだけで、メンガーのこの後の著作の真の草稿と

<sup>4)</sup> この作業と公刊は、最初は1960年代に一橋大学によって計画されたが、なんらかの理由によって放棄されたようである。我々は、この文庫に対する注意を研究者に喚起した点で、エミール・カウダーに感謝したい。カウダーが達成した業績は、292頁のタイプ印刷版となっている。これだけの量の書き込み、考察、訂正、コメントを整理するという困難を前にして、息子のメンガーもやろうとしなかっただけに、カウダーの業績は注目すべきものである。父メンガーも、一時は初版の改訂版を計画したが、あっさり諦めたようである。

<sup>5)</sup> 一番古い書き込みは、天然インクを用いており、薄れている。より新しいものは、化学インクを用いているので長持ちし、容易に判別できる。メンガーは赤鉛筆、青鉛筆も用いている。言語については、メンガーの書き込みは、当然ながら、ドイツ語、というよりはウィーン方言がもっとも多い。英語、フランス語による書き込みも見られる。イタリア語、ラテン語、古代ギリシア語（主に、アリストテレスやプラトンからの引用）はより少ない。

<sup>6)</sup> Leipzig & Heidelberg, 1863

なっているのである<sup>7)</sup>。

しかしながら、メンガー文庫に含まれるこれら二点の書物がもたらすものが、いかに重要であるにせよ、それはこの文庫の豊かさの一端を示し、メンガーの思想に関してこの文庫から得られるべきものを示唆するにすぎない。メンガー文庫の他の多くの作品に現れている欄外の書き込みは、真の探索を待っているのである。文献学的に意義があり、メンガーの思想に関する示唆が期待できるにもかかわらず、これらの書物にある手書きの書き込みは、これまで網羅的な探究の対象になっていなかった。カウダーの業績は、それだけでもかなりのものであるが、特に経済学の主要テーマとメンガー思想の哲学的源泉に関して、補強する必要がある。

それで、我々は我々自身で、メンガーによる参照文献についての書き込みを、ほぼ網羅的に取り出した。この書き込みは、『ニコマコス倫理学』や哲学史の教科書(ユーバーヴェク Überweg によるもの)のような哲学作品に関する場合は、特に丁寧に正確になされている。メンガーの歩みを把握するためには、この経済学者の注記を可能な限り掘り下げて調査する必要がある。従って、我々の主題にとっては、メンガーの思索の進展と彼の思索の哲学的源泉との関連を理解せねばならないのである。我々は経済学と哲学の著作を優先的に扱い、これら二分野の中では大きな伝統の中にある主要な作者を優先した。メンガーの立場は、彼らに好意的なこともあれば敵対的な場合もあるが、今日ではあまり知られていない作品でも、当時はたいへん流行していたものもある。ある種の教科書などがそれであって、メンガーはそれらに多くの書き込みをしているので、注意を払わねばならない<sup>8)</sup>。

## メンガー経済学の諸概念における近代的源泉と古代哲学

我々の調査から、いくつかの意義ある結果が得られたが、それらは更に、次の成果を導くであろう。メンガー文庫を紹介したので、残されたスペースで可能な範囲で、我々が到達した結果を示したい。

科学についてのある種の問題概念があって、科学を、技術的合理性による征服が蓄積される過程と捉えている。確かに変調(「科学革命」)も含まれるが、絶えず新たに、形而上学的思考の時代から離れていく進歩を示しているのである。こうしたナイーヴな見方は、コントの実証主義

---

<sup>7)</sup> エミール・カウダーが、メンガーのラウについての書き込みが重要だと考え、メンガーが自分の著書になした注を解説するのと同じ努力を傾けるに値すると判断したのは、こうした点を意識していたからだろうか。いずれにせよ、カウダーは自分の業績(未公開)に Carl Mengers erster Entwurf zu seinem Hauptwerk “Grundsätze” schreiben als Anmerkungen zu den “Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre” von Karl Heinrich Rau という表題をつけた。カウダーの作業は、一年で完成した。カウダーは前回の解説と同じ困難に直面した。彼は、前回同様、参照の注を原本の頁番号とともに記載し、可能な限りテキストを、書き込みの正確な場所とともに示している。その結果、読解はたいへん容易になっている。しかしながら、ここでは白紙が挟みこまれていない普通の刊本であるため、メンガーの言葉が付随の紙にまで展開することはない。また、彼自身の思想を訂正したり補足したりするものではなく、同時代の学問を批判することで自分の信念を強めようとするものである。メンガーは鋭い筆鋒で簡潔に表現しており、ラウの思想に関連づけながら彼自身の思想をたどることができるようになっている。我々も、我々自身で「滋味豊かな精髓」を引き出そうと試みた。

<sup>8)</sup> テキストをマイクロフィルムで大量に見ることにより、作者の著名度や作品のテーマ別分類に関係なく、書き込みに注意を払うことが可能になったことを、付け加えておこう。また、とりわけ政治に批判的なパンフレットにも、注意を引かれることになった。それらは、通常はあまり重要とは考えられないであろう。メンガーの知られざる一面がかいま見える。

に由来するもので、なんと言おうとも、歴史主義の立場に立脚し、哲学の伝統的枠組みからする諸概念が保ち続けている役割を無視するものである。「ウィーン実証主義」と呼ばれたものは、自らが用いる概念の論理的起源に直接に向き合うものであるから、恐らく上の批判は当たらないであろう。あらゆる形而上学を拒否するのは、従って、なによりも、ドイツの伝統および、それに由来する観念論という状況の拒否とみなされねばならない。ウィーン・サークルで表現されることになる哲学思想からの帰結は、ここでは直接には関係しないのである。

しかし、それより半世紀近くも前に経済学の分野で——それも、数学化されていない経済学で——カール・メンガーが、(経済学)理論の有効性の探究を含む方法論的基準を、すでに措定していたことは、指摘しておくべきだろう。カントおよび観念論的なドイツ哲学すべてから、自発的かつ意図的に離れることにより、メンガーは、ドイツ歴史学派がよかれ悪しかれ吸収していた源泉に反対して、自らの位置を定めたのだった。だからといって、新たな経済学の言説を構築するのに、哲学への言及をすべて断念したわけではない。そのようなことは全くないのであって、我々は以下にその点を取り上げる。

さて、こうした源泉を我々が明らかにすることができれば、近代経済思想の主要な流れのひとつであり、メンガーを受け継いでいるオーストリア学派を理解するのに、本質的な意義を持つことは明白ではないだろうか。その点を見定めるために、まず、このオーストリア人経済学者にとって、観念論的伝統の放棄とはいかなるものであったのかを示し、ついで、それよりもずっと前の思想でありながら、憑かれたように書き込みに出てくるものに対する彼の注意、すなわちアリストテレスへの言及に触れたい。

オーストリアの著述家がドイツの伝統に対してためらいがちになるのは、驚くことではないだろう。19世紀末の経済学者にとっては、敵意は大変特殊な次元で現れた。メンガーにとっては、ドイツ経済学を支配する歴史主義と闘うことだったのである。メンガーは歴史学の役割を否定したわけではなく、理論をそのために犠牲にすることを避けようとしたのだった。社会政策学会会長であるグスタフ・フォン・シュモラーは、事実、原則的な反理論主義を標榜していた。彼が、示唆を受けたとする19世紀初頭の思想家たちの中で、サヴィニなどをヘーゲルのような他の人々から区別するのは、ドイツの学界を覆う全般的な断罪の中では、もはやたいした意味を持たない。というのも、科学的知識が批判にさらされているのだからである。

「(経済学は)むしろ主として、政治経済学およびその諸部門の本質と概念、その真理の性質…の課題を中心に行っているのであって、…経済学研究という目標への認識通路ではなくて、(この目標自体がまだ問題となっている)」(原文ドイツ語)<sup>9)</sup>

経済学者たちは、机上の空論で満足した。彼らは、きりのない議論に終始し、メンガーはその議論が成果をもたらさないことを揶揄している。「このような法則が、思弁的な方法によって得られるべきか、または経験的な方法によって得られるべきか、帰納的な方法によって得られるべきか、または演繹的な方法によって得られるべきか」(原文ドイツ語)<sup>10)</sup>。あれこれの経済法則の性質を問う前に、まず法則を確立せねばならないだろう。用いるべき方法の本質が何かを問う前に、問題自体に直面した方がいいだろう。ドイツの経済学者たちは、メンガーによれば、「メタ経済学」にしか到達しない。それは、他の時代なら歓迎されるだろうが、研究の努力を食

<sup>9)</sup> Karl Menger: *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und der politischen Oekonomie insbesondere*, Vorrede, p. V

<sup>10)</sup> *Untersuchungen...*, Vorrede, p. VI



い物にすることによって、19世紀の経済学を生氣のないものにした、というより、揺りかごの中で窒息させたのである。

経済学の目的に関するこうした無理解の原因を探究するにあたってのメンガーの態度は、一方では歴史の無差別な利用を公然と非難するとともに、他方では、こうした過誤の哲学的基盤に向き合うことであった。カントについての彼の判断が、そのことを示している。ユーバーヴェクの教科書『近代哲学史要綱 Grundriss der Geschichte der Philosophie der Neuzeit』の欄外に書き込まれた注記に、その点が明示されている。メンガーが所持していた刊本を調べると、彼がこの本を注意深く研究したことがわかる。文献学的に見ると(エミール・カウダーによれば)、ユーバーヴェクを読んだのは1883年の『社会科学、特に経済学の方法に関する研究』執筆に先立っており、従ってこの読書が執筆に影響したのである<sup>11)</sup>。

メンガー文庫にある書物を調査すると、方法論争という真の闘争のために、メンガーが可能な限りの討論材料を集めたのだということが、いやでも感取される。彼が哲学書に抱いた関心、および心理学、民俗学、さらには旅行記までに対する関心は、論争の必要に関連しているのである。メンガーもその点を明示している。ユーバーヴェクの書物において、カントによれば科学によって発見された関係は、我々の精神の中のみ存在するのではなく、外部世界の現実を表現していると説明しているページの脚注のところで、メンガーは欄外に「私の学説にとって非常に重要である」(原文ドイツ語)<sup>12)</sup>と書いている。

他の哲学者についても同様で、実に様々な書物から、自分に役立つものを引き出しているのである。カントに関して言えば、メンガーの関心は実証性の肯定と科学的であることの必要性にとどまっており、『純粹理性批判』のいくつかの節を利用しはするものの、カントの体系をそのものとして受け入れるわけではない。メンガーの確信は、次の批判的な注記から読み取れる。

「彼(カント)は理論経済学のなかに純粹理性を見ていない」(原文ドイツ語)<sup>13)</sup>

メンガーが、経済理論を科学にすることによって樹立しようとするのは、まさにそのような純粹理性にもとづく科学なのである。彼が「純粹理性」の語で考えているのは、自然科学と対象は異なっているものの、それと同じくらいに精密な科学の可能性である、という点は重要である。ドイツの経済学者に関して言えば、彼らはもはや経済理論の可能性を信じてはいなかったからである。

メンガーがその点で、プロシア的観念論に対するウィーンの敵意に影響されたか否かは、副次的な問題であり、メンガーは両者の距離を、創出するとともに、肯定したのである。カントの思想は、メンガーには自分の計画とは異質のものと思われた。カント思想は、自分が考えている科学的な計画と同様のものを、ドイツで実現するのを妨げる要因にすらなつた。それだけでメンガーには、観念論から生まれたすべての教義を敵とみなすに充分だった。彼にとっては、それは教義であって、科学ではなかつたのである。

<sup>11)</sup> カウダーの議論は、以下の通りである。この教科書に加えられた書き込みや説明の豊富さ、メンガーが採録した一節(例えばフランシス・ベーコンについての節)とユーバーヴェクの関連する章への彼の書き込みとの、注目すべき一致。これらから、メンガーが自分自身の著作のための議論を探すためにユーバーヴェクの教科書を読み、書き込みをしたことは明白である。

<sup>12)</sup> Friedrich Überweg: *Grundriss der Geschichte der Philosophie der Neuzeit*, Berlin, 1872, p. 150, 著者の注に対する手書きの書き込み。

<sup>13)</sup> *ibid.*, p. 172, 欄外の注。メンガー自身がこの箇所、自分の批判を明確にするために、178頁およびそれ以下の自身の書き込みを参照するよう指示している。

メンガーの手書きの書き込みからは、このように、彼が哲学書を読み、議論に活用していたこと、ドイツ的伝統の拒否は哲学全体の拒否ではないことが明らかになる。古代哲学が、とりわけ彼の関心を引いた。彼の書き込みの中で、もっとも多く現れる思想は、『ニコマコス倫理学』から引いてきたものである。メンガーはラテン語・古代ギリシア語に通じており（当時の教授としては普通のことだった）、古代人に関心を抱いていて、それ故、自分自身のために必要な議論を古代人に求めるようになった。カトリックのオーストリア＝ハンガリー帝国の当時の大学では、19世紀末になっても、アリストテレスや聖トマスの権威に依拠した議論で科学を論じることが、珍しくなかったのである。メンガーも、ハプスブルク家の若い皇太子の教育係をしていた際、そうしたやり方をあまりしなかったために、冒涇のかどで告発されたほどなのである。

誹謗者に応じるためにも、アリストテレスの著作の研究は必要だった。『方法に関する研究』の補論七は、アリストテレスのテキストと両立しないという非難に対して、『政治学』からのいくつかの抜粋に関する委曲を尽くした文献学的研究という体裁のもとに、回答を行なっている例を示している。しかしメンガーは、アリストテレスのうちに、反対者への答えのみを求めていたわけではない。新しい概念を養うべきものを探していたのである。メンガーが所持していたアリストテレスの著作のうち、一橋大学の文庫には『ニコマコス倫理学』一点しか存在しない。それには、通常『経済学』のタイトルでまとめられる二つの作品のうちの第一のものが合本になっている。これは、一時はアリストテレスのものとされていたが、実際にはおそらく弟子の一人が書いたものである<sup>14</sup>。メンガーが『原理』やラウの教科書に行なった書き込みとは逆に、この作品に書き込まれたものは、復刻されてこなかったのである。

メンガーの興味を引いた『ニコマコス倫理学』のいくつかの節は、この経済学者にとって本質的なポイントとなっていた。相互関係に入ろうとする個人という観点からの交換についての考察を、彼はそこに見いだしたのである。これらの節の方が、全体論的な構成を持つ歴史主義の概念よりも、メンガーには適切に思われた。我々の関心にそくして言うと、メンガーが所持していた版にはたくさんの下線や書き込みがあり、メンガーが関心を抱いた箇所は明白に示されている<sup>15</sup>。

メンガーがアリストテレスのテキストに親しんでいたと頭から想定したが、それを突飛なものを受け止めないでいただきたい。オーストリア＝ハンガリーにおいては、ギムナジウムを終

<sup>14</sup> この本は、語の本来の意味に従って、経済学 (économie politique) ではなしに家政学 (économie domestique) を扱ったものであるから、我々にとっては副次的な意味しか持たない。この本に関しては、collection des Université de France, Guillaume Budé, Paris, 1968 に取められた、Van Groningen と Wartelle による刊本の序文を参照。

<sup>15</sup> メンガーが所持していたもので、現在メンガー文庫にあるのは、Dr. J. Rieckher によるドイツ語訳 Aristoteles Werke, Schriften zur praktischen Philosophie, Nikomachische Ethik であって、これは Osiander による Griechische Prosaiker in neuen Uebersetzungen の叢書 (Stuttgart, 1856) に取められたものである (以下、これを Nik. Ethik (M) と記す)。メンガー文庫での分類記号は Philos. 1 である。文庫本にも似た小型の書物であり、ずいぶん使用した形跡がある。周知のように、このアリストテレスのテキストの分け方には、ふたつの様式がある。ひとつはイギリスでの刊本にみられるもので、他のひとつはドイツの刊本のものである。メンガー文庫にあるのは、言うまでもなく、後者である。前者によるものには、フランスでの Zell と de Didot による刊本 (これは Argyropoulos と Lefèvre d'Étaples に由来する) があり、後者には Bekker によるもの (これは Th. Zwingger と Duval による刊本に依拠する) がある。アリストテレスのこのテキストの成立については、L'Éthique à Nicomaque, Publications universitaires de Louvain, 1958 の Gauthier と Jolif による序文が詳しい (以下、この版を Ethique (GJ) と記す)。

える頃からアリストテレスを翻訳とギリシア語で読むのは、当時の伝統だった。メンガーは、恐らく、若い頃にアリストテレスのテキストに触れた際に始めた考察を、そのまま続けたのである。その点はともかくとしても、彼は自分の本に入念に書き込みをしている。目下の研究から我々が得られた結論は、いまだ部分的であるが、それらを明らかにするためにここで関心を引くのは、アリストテレスのテキストについての彼の考察なのである。

メンガーは、『ニコマコス倫理学』の五篇と九篇とに、とりわけ書き込みをしている。それらは、それぞれ、正義および友情に当てられた箇所である。彼の関心が交換にあるのは、明らかである。それはどのように行われるのか。何がそれを規制するのか。そして、その実践にあたっては何が尺度となるのか。尺度がなければ、当事者の一方は欺かれ、正義は尊重されない。そして正義が要請する慎重さがなければ、友情は、我々が単なる「実務的關係」と呼ぶものの中にあるような友情であっても、存続しえないであろう。

アリストテレスのテキストの詳細にまでは踏み込まないまでも、メンガーが書き込みをしている箇所、彼が抜き書きをしたと思われる箇所はチェックしておくべきだろう。なぜなら、1871年の『原理』への手書きの書き込みは、『ニコマコス倫理学』の同じ箇所を参照の注記として記しているからである。彼がとりわけて注意を払っているのは、配分的正義における適正点の決定のための、比率の定義である。アリストテレスのドイツ語版で、メンガーは「しかし、平等は中間なのだから、正しさは中間の一種であろう」(原文ドイツ語)<sup>16)</sup>という箇所に下線を引いている。“Verhältnißmäßiges” (比例的)<sup>17)</sup>というタームが、アリストテレスによる正義の計算で本質的であることは、周知のことである。彼は二つの正義の計算を対比させる。幾何学的と算術的である。メンガーは、経済を均衡(ワルラス)によって扱うことに反対しており、彼が引かれるのは計算という考えそのものではなくて、交換における財の比較である点を、指摘しておこう。財はどのように評価されるのだろうか。

アリストテレスにおいては、推論は、『倫理学』冒頭のアプローチの方法についての探究で述べられているように、対置を通して進められる。アリストテレスは、肯定的な項を同定するのに、否定的な項の同定から始める。不正と不平等の間に同一性があるなら、正義と平等もまた同一なのである。しかして、過多と過少の中間は平等である。故に、正義は中間なのである。彼による幾何学的な特長づけは、四つの相互に独立な項、すなわち二人の人とふたつの「取り分」によってなされる。それらの項は長さ、もしくはA, B, C, Dの線分によって示され、『その人々にとって』と言われる人々と、『その事物において』と言われる事物とは、それぞれ同じ割合で分割されるのである」(原文ドイツ語)<sup>18)</sup>となる。配分的正義の四つの項は幾何学的な比例をなす。すなわち(連続的比例ではないのだから、相互に独立のA, B, C, Dとして) $A/B = C/D$ ならば $A/C = B/D$ であるとともに、 $A/B = C/D = (A+C)/(B+D)$ なのである。

比例性を数学的に表示することには、メンガーはこだわらなかった。重要なのは、交換における一定の正義の定義である。しかし、可能なのはそれのみではない。これらの点は、古代ギリシア研究者や古代・中世の経済思想家にはなじみ深いものだが、近代の経済学者にとって

<sup>16)</sup> 1131a14, Nik. Ethik (M), p. 140

<sup>17)</sup> “Mithin ist das Recht etwas Verhältnißmäßiges”, 1131a29, Nik. Ethik (M), p.140

<sup>18)</sup> 「人と取り分を示す長さは、同じやり方で分割される」Ethique (GJ), p. 130, 1131b3, Nik. Ethik (M), p. 141. この文は対になっており、メンガーはそのことを141頁欄外に書きとめている。これは、彼がいかに注意深くこの節を読んだかを示すものである。彼は、アリストテレスが同様のことを述べている『政治論』, III, 9, 1280a16-18も読んでいたであろう。

意味があるのだろうか。確かに、価値を担う本質についての議論では、意味はない。アリストテレスが第五章の終わりでその点に触れる際には、彼は問題を未解決のままにしているのである。別の道が開かれるのは、第九章で友情関係を扱う際に、改めて交換に触れるところである。メンガーはアリストテレスのテキストで、これらの箇所印をつけている。ふたつの正義に関する使い古されたポイントが、彼には意味があったのである。

社会秩序における場もしくは地位といった語では定義できないが、算術的な様式で表すことのできる比例が、幾何学的比例と対をなす。この新たな比例が、調整的 (regelmäßig) 正義を特長づけるのである。問題になるのは、分配ではなく、交換である。調整的および配分的のふたつの正義の定義は、経済の分野に介入するものではあるが、相異なる平面においてそれぞれの役割を演じるのだということに注意しよう。調整的 (均衡的) 正義は交換におけるものであり、配分的正義は社会的分配におけるものなのである。配分的正義の場合を、アリストテレスは次のように確言する。「商業社会の利益に関して分配が行われるとするならば、それは用いられた資本に関連して行われることになる」<sup>19)</sup>、すなわち上記のような幾何学的比例に応じてである。

調整的正義は、個別の個人相互の交換の場面で、彼らの地位にも、品位すらにも無縁に、適用される。アリストテレスはその点を、「ならず者」を例にとることで示しており、メンガーもそれを見落とさなかった。後にはパレートが、麻薬患者にとっての財として、麻薬を経済財と定義することで、善良な社会にショックを与えるのを面白がることになる。こうした推論においては、道徳は働く場がないのである。

「高尚な人が姦通しても、卑劣な人が姦通しても変わりはない。法律はただくわえられた損害の違いだけに目を向け、問題にするのである。」(原文ドイツ語)<sup>20)</sup>

この推論において、このような道徳的中立性が意味を持つならば、需要される財は個人の選択と世の中の状態 (および、彼に可能な選択肢を示し、要するに主体を世の中に結びつける、当該個人の知識) にしか依拠しない。各人は、こうして、彼に固有の財の階梯を認識する。しかして、この財の階梯という思想が見られるのは、またしてもアリストテレスにおいてなのである。メンガーはそれを、三角形の図式で、ひとつの財を飽満に消費するとより上位の財に移行するものとして表している。交換を行なう相手方とのふたつの階梯を示し合うことにより、今度は「価値」の測定が可能になり、それによって交換が実行に移されるのである<sup>21)</sup>。この推論の到達点は、確かにアリストテレスのものではない。この結論に対する大きな障害は、アリストテレスの立場であって、それによれば交換の適正点は平等なのであるから、交換する当事者どうしだけでなく、時間的に交換前と交換後においても平等でなければならない点である。

取引において偶発的に起こりうる不正行為の場合を除くならば、交換の前と後において、正

<sup>19)</sup> Ethique (GJ), p.131, 1131b27, Nik. Ethik (M), p. 142.

<sup>20)</sup> Ethique (GJ), p. 131, 1131b33, Nik. Ethik (M), p. 142. 従って、当該個人に対する道徳的判断がいかなるものであっても、この推論は有効なのである。こうした中立性は、効用価値説にとって本質的である。

<sup>21)</sup> この点は、ワルラス関数によらなくても成立する。伝統的には、メンガーの著述の他の部分、とりわけ無知に関する部分は無視されてはいるものの、双方のアプローチは同一の帰結をもたらすと考えられており、その見解は正しいのではあるが。新古典派の通常の仮説における諸条件も、そのひとつである。しかし、オーストリア学派の独自性は、メンガーが設定した枠組みの中でもそうした諸条件から抜け出しうる点にあるのであり、メンガーにそのような設定が可能だったのは、ある程度は、アリストテレスのおかげなのである。

義の形相として財が平等であるという考えに、メンガーは強く反対する。交換の前と後で「同じ物」を持つという考えを彼が拒否するのは、その考えが矛盾を含むからである。もし同じならば、そもそも交換が行われないうちであろう。交換の実施を誘発するのは、主体が置かれた諸条件のもとで、自分の状況を考慮する際に、この交換を実施し、自分が豊富に持っているため価値がより少ないものを放棄するかわりに、自分に欠けていて自分が手に入れたと思うものを入手することで、自分は得をするのだという主観的確信なのである。

アリストテレスは、第九篇で友人間の関係を扱う際に、これに近いものを定式化している。アリストテレスは、親族型の友情と恋愛型の友情、および我々なら「実務的な関係」と呼ぶであろうものを区別している。アリストテレスのテキストの中に問題が指定されていることに、メンガーははっきり気づいている。「施しの価値は、それを受け取る——そして得られた優位に比例して返礼する——者が得る優位によって計られるべきだろうか。それとも施した者の善行によって計られるべきだろうか。」(1163a9) そして第二の場合「誰がその代価を決めるのだろうか」(1164a22)。

第二の定式は、第一のもの（ドイツ語版では「だが、値打ちを決めるのは何方の側のすることだろうか。利益を提供する人だろうか。それとも、すでに利益を受けた人だろうか。」(原文ドイツ語))よりも直接的である。メンガーは、彼自身の関心に関わる問題を、欄外に一語「価格 Preis」と要約している。アリストテレスは彼の疑問への解答を示しており、そこには、交換に入る各人に示される効用、すなわち受け取った施しを測定するために各人によって評価される効用の評価の原則が示されている。それは、友情についてのテキストにおいて定式化されている。というのも、友情とは「サービス」をもたらし合うものだからである。しかし、ここで問題となる財の階梯比較の「相互性」は、商品の交換においてペンディングになっていた問題を解決するものなのだろうか。アリストテレスが先の問題を解決したのだろうか。それともメンガーが、自分なりの解決を導くために、このテキストを見つけたに過ぎないのだろうか。この点（他にもありうるが）にここでは立ち入らず、メンガーはここからインスピレーションを得たのだと我々が言うほどに、彼はこのテキストに注目を払ったのだと記しておきたい。

## メンガー文庫：「偏見なき人」であるオーストリア人経済学者の証人

このようなわけで、ついに「科学的」な経済学パラダイムを樹立した、このオーストリア人経済学者に関して、彼は哲学的源泉から、そのパラダイムの基盤を築いたのだと結論することができるだろう。ドイツ観念論の伝統の放棄、および19世紀ドイツの経済学研究を踏み迷わせることになった原因のひとつと彼が考える、ある種の形而上学の放棄は、形而上学全体を放棄することを意味するものではなかったのである。それどころか、彼自身がドイツ歴史主義の欠陥と数学的推論とを避けることにより、メンガーはオーストリア学派に、その独自性とスタイルとを与えたのである。このスタイルは、主題系の哲学的基盤を不可欠とするものだった。メンガーはその基盤を、経済の分野に、論理学の分野におけると同様に、初めて推論のための術語をつくった哲学者、すなわちアリストテレスに求めたのである。近代科学の創出が、それによって古代哲学の枠組みを乗り越えることになるのは、あまりにも自明である。論理学も、まさに、メンガーが執筆活動をしていた時代に、変革を経験していた。認識論による論理学と推論の革新と同世代のものとして、経済学を科学として革新することは、もっとも古い哲学のひとつを足場にすることによって、達成に向かったのである。

我々がたどり始めたのは、人文学者的な碩学としての人物像だった。我々の考察を閉じるに

あたって、このウィーンの教授の人物そのものに一言触れておきたい。経済学体系の形成時代は、方法論や歴史的概念の面で、観念論やそれに基づく「概念」「歴史としての時間」などの概念と、いやおうなしに関係を持たざるを得なかったのだが、我々の見るところ、メンガーはそうした時代に終止符を打ったのだ。観念論のいう歴史は、必然的に目的論を指向する。カントかマルクスか、または歴史主義かによって、目的論の内容は異なるが、常にフィシテのいう「人間の運命」のようなものを指していたのである。

しかしだからといって、それに続く暴力と大衆の時代に、メンガーは属しているのだろうか。我々には、そうは思われぬ。彼はむしろ、先立つ啓蒙思想および感覚論的で「抽象的」な18世紀と、近代科学、彼に関していえば経済学の理論の時代との、橋渡しをしているのである。すなわち、一言でいえば認識論の時代であって、その分野でウィーンはすでに有名であったが、さらに彩りを添えようとしていた。早い話、彼自身の息子であるカール・メンガーが、アメリカに亡命する前には、この動きの上昇に参加していた。ドイツ観念論から発する19世紀的な体系と訣別してからは、まるでこの体系がすべて諸共に消滅したかのように、あらゆるものが、少なくとも理論の分野では、出現した。理論的構築は、認識論的にあらかじめ有効と認められていた概念と論理学とに基づいて再建された。その際、「転覆」させられた観念論の遺産がまだ展開している分野は、逆説的ながら、社会運動の分野だった。理論の分野の方は、科学と、科学の基準を満たす研究の実践とに、決定的に根をおろすことになった。

もしそうであるなら、メンガーは、その方法においてはすでに未来に属しているものの、その理念においては過ぎ去った世界、一種の啓蒙専制主義の世界に関与していたのである。皮肉なことに、ハプスブルク家のヨーゼフ二世のもとで形成された理念、とりわけ「偏見なき人」の理念は、法学者で経済学者のヨーゼフ・フォン・ゾネンフェルズ(1732-1817)のような官房学派によって形成されたのだ。しかし、メンガーはそこから進歩の理念を引き出したのである。軍国主義で宗教的な諸概念が、その障害になったのではあるが。

この点では、我々が入手できる伝記的データも参考になる。帝位継承者であるルドルフに無神論を教えているという、宮廷での非難。さらにはカトリックのオーストリア帝国では、臨終にあたって終油の秘跡を受けたことを記載するのが慣例なのに、彼の公式の死亡通知にはその記載がないこと。とりわけ、書籍収集としての意味が疑わしい印刷物(政治的誹謗文書など)も入手し、そこに書き込みや注記をしていること。これらは、メンガーという大教授・高級官僚が開放的な精神を持っていたことの証であって、彼は同時代の浅薄さや萌芽的な悪癖に対して、決して譲歩しなかったのである。

しかし、何よりも重要なのは、彼の科学に対する信頼である。人間精神の必要を満たさねばならないのは科学であって、幻想ではないという深い確信を示す例は色々あるが、その中で、他の人たちが自らの言明にもかかわらず奇妙な態度を取った時には、メンガーは常に不快感を表した点を挙げておこう。例えば、官房学者で詩人のユング・シュティリンク(Jung-Stilling)が死後の生命という理論に賛同していることを、ロッシャーが『国民経済学史』の中で称賛している箇所に、メンガーは感嘆符をふたつも付けているのである<sup>22)</sup>。『方法に関する研究』の最後の補論を終える数行において、歴史学派のいわゆる「倫理的」な傾向に対するメンガーの判断が述べられているので、そこを読んでおこう。

<sup>22)</sup> Wilhelm Roscher: *Geschichte der National-OEconomie in Deutschland*. München, 1874, メンガーの注は552頁欄外。

「経済学の倫理的方針の追求は、一部は古代的世界観の名残であり、他の意味では中世的・禁欲的世界観の名残であるが、大部分は、歴史記述の倫理的方針と同じように、学問上の至らなさのあわれな松葉杖なのである。」(原文ドイツ語)<sup>23)</sup>

こうした進歩の概念、科学への信頼、幻想の放棄、賢明な改革への嗜好は、この帝国高級官僚にして、当時のヨーロッパ列強の一国においてもっとも権威ある大学の著名な教授であるメンガーが、「オーストリア啓蒙」と呼ばれるものの継承者であることに呼応している。この啓蒙は、18世紀に出現した「偏見なき人」(もしくは「先入観なき人」という理念によって、特長づけられている。メンガー文庫購入の経緯を伝える記事をもって本稿を始めたが、その記事の著者である日本人が、ある種の通俗化を含みながらも指摘しているように、ウィーンは「東欧のパリ」という評判を得ていたのであって、そこでは啓蒙が未だ輝きを保っていたのである。

偏見のなさは、彼のものであった文庫のほぼ普遍的な内容にも、恐らく表れている。この性格は、一橋大学古典センターのカタログの冒頭に掲載されている、このオーストリア人教授のスケッチを補うものである。新しい科学の形成は、人間関係の経済的形態すべてを最終的には分析すべきものであるのだから、メンガーは自分自身が生きている以外の社会形態にも関心を持たざるを得なかったのである。

## 結 論

これこそが、メンガー文庫を訪れる人が抱く第一印象なのであり、ここから本稿を始めることも可能だったのであろう。この文庫には、経済学書と同じくらいの旅行記があり、本稿の短いスペースでは取り上げられなかったが、ヨーロッパから大きく隔たった様々な社会における人々の行動について、手書きの書き込みが豊富に見られるのである。

繰り返すが、自国の過去に沈潜しているドイツ歴史学派とは反対に、メンガーは初めて「世界的」な視野を示しており、発見の驚嘆と探検の興味が入り交じっている。そこには、「精密な」経済科学によって社会のあらゆる形態を研究することが可能であるという、揺るぎない確信がこめられているのである。民俗学という別の科学<sup>24)</sup>にまでは行き着かないものの、経済理論を原始的経済へも関わらせようとする自体が、その確信を示すものだった。当時においては、その関わらせ方を探らねばならなかったのではあるが。

「偏見なき人」であったカール・メンガーは、古代人に学んだ哲学的概念を基盤として、経済理論から「国民経済学」という性格を払拭し、歴史研究によって位置づけられる時代の性格を帯びるとともに、その時代に固定された知を、普遍的な価値を持つ「一般」理論へと作り変えたのだった。経済自体が「グローバル」になるよう運命づけられていたわけだが、彼はこうして、経済の領域を開放するのに貢献したのである。メンガー自身が「国境なき人」ではなかったにしても、少なくとも彼の文庫は、海を越えることで、世界へのこうした開放の象徴的な証となっている。そして、地球の裏側で、研究者の来訪を待っているのである。

<sup>23)</sup> Carl Menger: Untersuchungen..., Anhang IX, p. 291.

<sup>24)</sup> メンガー文庫には、今日ならこの範疇に分類されるであろう作品が多数みられる。それらには、旅行記や、出会った人々の習俗よりは自分たちの波瀾万丈の行路の方を語っている冒険家のものも、しばしば含まれている。まだ「発見」の時代だったのである。しかし、メンガーが、自分のすでにして科学的な考察に資するために、こうした文学から多くのものを得ていることが、書き込みから窺われるのは興味深い。

## 参考文献

### 1. メンガー文庫（抜粋）

メンガーによる書き込みを、我々が利用したもの（カッコ内は請求記号）。

ARISTOTELES: *Nikomachische Ethik*, in *Werke, Schriften zur praktischen Philosophie, erstes Bändchen*, übersetzt von Dr. J. Rieckher, hrsgb. von C. N. v. Osiander, Stuttgart, 1856; (Philos. 1) … Die Oekonomik (ein Fragment) と合本, これはアリストテレス (および Xenophon の Oikonomikon) の偽書だが, 19世紀までは真作とされていた。Susemihl, F, *Aristotelis quae feruntur Oeconomica*, Leipzig, Teubner 1887 参照。

KRAUS Oskar: “Die Aristotelische Werttheorie in ihren Beziehungen zu den Lehren der modernen Psychologenschule”, Separatabzug aus der *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Verlag der H. Laupp’schen Buchhandlung, Tübingen, 1905 (著者からメンガーに献呈されたもの); (Mon. 1705).

— : *Literaturbericht zur Lehre von den Bedürfnissen*, Prag.; (Mon. 1704)

ÜBERWEG Friedrich: *Grundriss der Geschichte der Philosophie der Neuzeit*, Berlin, Mittler, 1872; (Philos. 26)

ROSCHER Wilhelm: *Ansichten der Volkswirtschaft aus dem geschichtlichen Standpunkte*, Leipzig und Heidelberg, 1861; (Mon. 3358)

STUART MILL John: *Grundsätze der politischen Oekonomie*, übersetzt von Adolf Soetbeer, Hamburg, Perthes-Besser und Mauke, 1864; (Eng. 983)

RICARDO D.: *The Works of David Ricardo*, ed. J.R. McCulloch, London, 1846; (Eng. 1247) および, そのドイツ語訳 E.Baumstark, Leipzig, 1837-38; (Eng. 1246)

MENGER Carl: *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 発行者から献呈されたものの手沢本 : *Allgemeine Theoretische Wirthschaftslehre*, Wien, Wilhelm Braumüller, 1871; (Mon. 2142)

— : *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, insbesondere der politischen Oekonomie*, Leipzig, 1883; (Mon. 2150B)

— : *Lorenz von Stein*, Jena, september 1890; (Mon. 2156)

AUSPITZ & LIEBEN: *Zur Theorie des Preises*, Leipzig, Duncker und Humblot, 1887; (Mon. 91)

BÖHM-BAWERK: “Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwerts”, in *Jahrbüchern für Nationalökonomie und Statistik*, XIII, Jena, Gustav Fischer, 1886; (Mon. 332)

ROSSI: *Mélanges d'économie politique d'histoire et de philosophie*, Paris, 1857 (没後出版); (Fr. 1319)

### 2. メンガーに関する文献・解題

ALTER Max: *Carl Menger and the Origins of Austrian Economics*, Boulder (CO), Oxford, 1990. 本書は, 博士論文にもとづくもので, メンガー思想への最初のアプローチであり, 三部からなる。すなわち, ウィーンの時代的背景, 方法論, およびメンガーの価値論である。歴史的な視点からは完璧だが, 哲学に関してはやや適切さに欠ける。

ALTER Max: “Carl Menger and *Homo economicus*: some Thoughts on Austrian Theory and Methodology”, *Journal of Economic issues*, XVI(1) March, pp.149-60. オーストリア学派と新古典派の不一致に関する点<sup>が</sup>, 大変興味深い。

BLAUG Mark (ed): *Carl Menger*, Cambridge University Press, 1992. 参照すべき一巻。BOOS Margarete: *Die Wissenschaftstheorie Carl Mengers: biographische und ideengeschichtliche Zusammenhänge*, wien, 1986. 文献目録はたいへん豊かであり, 経済史の分野でのメンガーの業績に新見を示す。

CALDWELL Bruce J. (ed.): *Carl Menger and its Legacy in Economics*, Durham, Duke University Press, 1990. デューク大学でのコロキウムの記録に, メンガーの様々な私的文書の公刊が付け加えられている。この業績の後, なお残っている注目すべき文献は, 一橋大学の社会科学古典資料センターに存在するものである。



- HAYEK Friedrich von: “Carl Menger”, *Economica*, New Series, 1, (4), pp. 393-420, 1934. メンガーの著作の復刻により、彼を経済学者たちの書齋に再導入することになった論文。当時の経済学界におけるこの復刻の戦略的意義は、指摘するまでもない。
- KAUDER Emil: *Menger and his Library*, Tokyo, 1959. 一橋の古典資料センター(実際には当時は図書館。古典資料センターの設立は1978年: 訳者)にある資産の、簡潔で要領を得た報告。著者はこの資産を自由に利用し、初めてそれらの精査を実行した。このウェズレアン大学のオーストリア人教授は、効用の歴史を研究したが、我々はメンガーの関する資産についての知識を彼に負っている。同じ著者の “Intellectual and Political Roots of the Older Austrian School” in *Zeitschrift für National-ökonomie*, XVII(4), Dec. 1963, pp. 428-33
- LACHMANN Ludwig: “Carl Menger and the Incomplete Revolution of Subjectivism”, *Atlantic Economic Journal*, 1978, 6, 3, pp. 57-59. この論文は短いものではあるが、メンガーの立場と著者が考えるものを基にして、オーストリア学派の相続者たちの中で、独自の立場を確立している。オーストリア学派のふたつの相対立する傾向が、新古典派の流れとの関係で、浮き彫りにされる (Lachmann と Israel Kirzner の論争を参照)。
- O'DRISCOLL Gerald: “Money: on Menger's evolutionary Theory”, *History of Political Economy*, 1986, 18, 4, pp. 601-616. メンガーの『原理』を読む者が常に抱く疑問、すなわち彼の価値論と、貨幣論における「歴史的」(もしくは Driscoll によれば「発展論的」) アプローチとの整合性の問題について、興味深い視点を示す。
- ROTHBARD Murray: “The Hermeneutical Invasion of Philosophy and Economics”, *The Review of Austrian Economics*, 1989, 3, pp. 45-60. この論文は、基本的にはメンガーについてというよりも、オーストリア経済学の言説が扱うテーマを哲学が奪回する動きについて論じている。この奪回は、我々によれば、めざましい一致をもたらすべきものだが、著者は断罪している。オーストリア学派の外側にいる観察者と内側にいる擁護者の間に生じる、常に活発な論争が、容易に察知される。
- SCHMOLLER Gustav von: *Die Schriften von K. Menger und W. Dilthey*, *Archiv für Methodologie der Staats- und Sozial-Wissenschaften*, 1883, reed. Bibliography and Reference Series, 1968, New York. メンガーのもっとも著名な反対者による、新しい経済学についての論争の書。これがなかったら、「方法論争」は、経済学を科学とするための方法論という問題を提起するのに必要な反響を呼ばなかったであろう。
- STREISSLER, Erich: “To what extent was the Austrian school marginalist ?” in *History of Political Economy*, 1972, 4, 2, pp. 426-441
- STREISSLER, Erich: “Carl Menger on economic policy: the lectures to Crown prince Rudolf” in *History of Political Economy*, 1990, no. 22 への補遺, pp. 107-132
- VAUGHN Karen: “The Mengerian Roots of the Austran Revival”, in *History of Political Economy*, 1990 no. 22 への補遺, pp. 379-407. いたる所に見られる最近の関心の復活ののって、オーストリア学派の起源を再発見しようとする論文のひとつ。ここでのアプローチは、アメリカの学界に典型的なものである。

(原著者: ジル・カンパニョロ パリ第一大学哲学部講師)  
(訳者: 山崎耕一 一橋大学社会科学古典資料センター教授)